



Title	中井家と頼家
Author(s)	頼, 祺一
Citation	懷徳. 1987, 56, p. 58-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90681
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

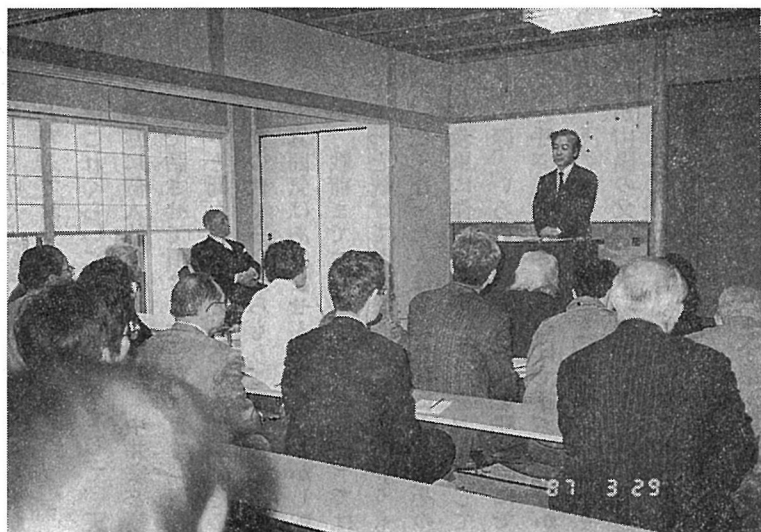
中井家と頼家

頼でございます。昨日から懷徳堂記念会の「懷徳堂と近世思想」というシンポジウムがございまして、こちらでも発表をしたわけでございますが、今日またこういう記念すべき日にお話をさせて頂きまして、非常に感謝しております。

実は広島の方でも、数年前から、頼春水の子であります山陽の顕彰会（頼山陽先生遺蹟顕彰会）というものを再建しております。この会は戦前は非常に活発でありまして、県が知事の給料と同じぐらいの額を毎年その会に寄付しておりました。さらに、全国から当時の金で三十万円も募金をいたしまして、広島市内の比治山という所に山陽神社まで建てようと計画いたしました。多分に当時の皇国史観の風潮に乗った、どちらかといえば戦争協力の一翼を担わされた所もあったのです。しかし最近

頼 祺 一

は、そうした過去の一時の評価にとらわれまいと、JC（青年会議所）の三十代ぐらいの若い人々が音頭をとりまして、これからは経済ばかりでなく文化や教育などにも儲けたお金を少しづつこもうじやないかという機運が生まれまして、広島文化の一つの代表である頼山陽を新たな眼で見直そう、そして山陽だけでなく地方文化を担った人々の事蹟を明らかにしていき、後世に引き継ぐことが我々の任務ではないかということで、顕彰会が復興したわけでございます。しかし、これがなかなか難しいことでございます。広島では、例えば県議会では頼山陽の顕彰をやってはどうかという話が出ますと、知事が「ああいう放蕩息子のために県民の税金を使うのは、もっての外だ。」などと堂々と答弁されような状況でございます。そうしたことが実はずっと続いております。



広島は原爆で本当に街の中が全部焼かれ、多くの伝統が失せてしまった何もないような所でございますが、先程の会長のお話にもございましたように、そういう消失したものを少しずつでも頑張って復興し二十一世紀に向けて伝えていこうと考えましても、本当に基金が問題でございます。頼山陽が『日本外史』を書いたという頼の旧居（戦後再建）のそばに、戦前の建物で、広島市内で爆心地近くではほとんど唯一と言っている日銀の建物が残っておりますが、その日銀が建て直すので山陽記念館の土地を全部提供してくれということを言ってきたりました。それで、全部は困るが一部提供して、それを顕彰会の基金にしたらかと色々青写真も作り交渉いたしました。結局日銀は別の場所に移ることになってしまいました。その訳を尋ねてみますと、みんなが忘れているはずの頼山陽の亡霊のようなものが今でも生きていて、そのために日銀の方との交渉がうまくいかなかったということがあったらしいのです。これはこれでうれしいことではございますが、基金の話は一頓挫いたしました。今から新たに資金を集めようという話もございすが、非常に難しい。そこで、懷徳堂・友の会および記念会に学ばせて頂きまして、地道な活動から始めていく、

例えば講座などを催したりしながら、地元の文化活動と提携してやってゆくということで、これからも頑張っていきたいと考えております。

前置きはこれくらいにさせて頂きまして、実は今日は、私の非常に個人的な関心ですが「中井家と頼家」というテーマで話させて頂きます。私はよく「素説をやられましたか」と聞かれることがあります、そんなことは我家でも父の代ぐらいからもうございまして、とてもそういう雰囲気はありませんでした。しかし戦後はやめました、戦前までは本家（竹原春風館）では儒風のお祀りをずっと続けておりました。祠堂というものがありまして、亡くなった人はみんな神になる、その神位をちゃんと儒教風に作りまして、それをお祀りしております。その際、いろいろな先祖の人を呼ぶ時にですね、「先生」と呼ぶ人と「さん」づけで呼ぶ人と分かれておりました。その中で、中井家と一番深いつながりを持っていたのが山陽の父の春水でございしますが、もちろん春水は春水先生です。そして、この春水には当時「頼三兄弟」と申しまして、相当世に喧伝された兄弟がいました、私の直接の祖先にあたります弟が春風、これも先生であります。三番目も杏坪先生と申します。それで、こ

の三兄弟の父はと申しますと、よく安芸国竹原の豪商とか豪農とか書かれています、実は紺屋・染物業でありまして、当時の町家のランクづけで言えば中の下程度で、あまり豊かとは申せない生活をしておりました。この人は、通称又十郎、亨翁こうきうと号しましたが、亨翁先生とは呼ばないで、亨翁さんなんです。また、春水の息子の山陽はもちろん先生であります。さらに山陽の息子で山陽廢嫡後、春水の後継となった聿庵は聿庵先生ですが、山陽が京都に出てから生まれた支峯や三樹三郎は、支峯さん、三樹さんと呼んでおりました。そのほかも頼の宗家以外は「さん」です。ところが私どもが子供の頃から聞いていますのは、備後の神辺におりました、この三兄弟の友人に菅茶山がいますが、この人は茶山先生。それから中井竹山は、竹山先生であります。この竹山先生と茶山先生は、父などの話にも「先生」としてしばしば出て参りまして、これなども春水が竹山先生や茶山先生を生涯尊敬していたことの表われではないかと思っております。

こうしたことは、例えば文書の保存状況にも表われております。春水という人は大変まめな人でありまして、大阪時代の色々な商家の買い物の領収書のようなものま

で、一点一点全部残している。最近東京の頼惟勤先生らいつとむがこれらを少しずつ翻刻していられますが、その中でもやはり、中井竹山、あるいは弟の履軒に関する史料は細大洩らさず残している。当時は表具屋に出すということはほとんどありませんで、表具でも自分でやる手表装で、ほとんど紙表装、少し良くなりますと家にある布を使つて、やはり自分で表装しておりました。ですから、巻物とか軸物などでもそういう簡易な表装をしておりますが、竹山先生のは、春水の手表装には違いありませんが、一番立派な布表装でちゃんと残されているわけです。それはやはり、基本的には学問の上でも尊敬していたこともありすが、竹山は春水にとって自分の「親分」であつたからです。「親分」というのは、広島では仲人のことでございます。つまり親と同じような感じですね。媒酌をしてもらう、そういうことを竹山先生が勤められたからでありまして、その事につきましては、この『懷徳』五十二号に書いております。

さて、そこで書いておりますことに二・三触れたいのですが、春水の父親の又十郎という人は大変な「教育パパ」でありました。自分の家から何とか学問をする人を出したいということが、恐らく二代程前から一家の夢で

あつたようです。ところが、自分は生業に追われて、和歌をたしなむくらいで学問に励む機会がありませんでした。そんな時春水が生まれて、筆硯をもてはやすのを見て、これは才能があると思つたのか、毎日隣りのお寺（照蓮寺）へ行き、そこで烏石山人の千字文を、借りて来るわけには参りませんので、毎日何字かずつ自分で写して春水に習わせる。こうした父親の努力もあつてか、春水は子供の頃から「神童」と呼ばれておりました。当時竹原にも学問を志していた人がいましたし、彼らは広島あたりの有名人、学者などとの交流もありました。そういうルートを通じて春水の書いた物を送るわけです。そうすると、田舎の竹原にもこういう素晴らしい人物がいる、といたく誉められ、喜んでいたようです。もともと当時は、書の方で神童と呼ばれていたのですけれども。

その後春水は大阪に参りますが、そのきっかけになりましたのは、少々汚い話ですが、春水は少年の頃から痔の病がありまして、その治療のために上阪することを口実にして、十九歳の時堺のお医者を訪ねて四ヶ月程このあたりに滞在しておりました。その当時のメモ帳が残っていますが、その中には堺はもとより大阪・京都および

その周辺の学者・文人の名前がずらっと書いてある。それに○印がついておりまして、その○印がついた人物には大抵会っていたようです。百人程の名前が書いてありまして、七十何人かに四ヶ月程の間に会っている事になります。それでは何をしていたのかと言うと、その間春水は、上方で誰に学べばよいのかということを一生懸命に考えておった。そして、彼らとのつながりを求めていた。実際には、当時知られていた安芸国出身の学者であります齋静齋いっせの所に、一月ばかり滞在していたようですが、こうして自分が将来遊学する時のための先生を探していたようです。残念ながら、そのメモには懷徳堂とか中井竹山の名前は出て参りません。それは恐らく、当時懷徳堂が専門の学問を志す人々のための教育機関でなかったからではないか、と思われまゝ。また、竹山は春水よりも十六歳年長でありましたから、この時既に世に知られていたと思われるが、それでも会っていないというのは、あるいは竹山がまだ懷徳堂の当主になっていなかったからだとも考えられます。

その後春水は、結局折衷学派の片山北海という人に師事するわけですが、この片山北海は学者であると同時に混沌社を主宰しており、医者や豪商あるいは蔵屋敷の役

人などといろいろ交流がある人物でありました。当時の大阪は商業の都でありまして、西国を中心とした各藩の蔵屋敷がありまして、その役人やまた豪商たちは実はこちらの教養人であったわけです。ですから、春水としてもそういう人々につきあうためには、真剣に学問をし、文化活動にも励まなければならなかったわけです。

これは余談ですけれども、後に大阪にやって参りました、春水や尾藤二洲などと一緒に学問をした人に、古賀精里という人がいます。この人は後に昌平黌の儒官になるのですけれども、その人の父親が佐賀藩の大阪蔵屋敷の役人でして、いつも豪商の前でペコペコして盃をもらって這いつくばっていた。その息子にあんな立派な人物が出たと言って、知人の間で評判になるということもあったようです。当時の豪商の力がいかに強かったかがしのべれます。さて、そうした雰囲気の中で、蔵屋敷の役人までも含んだ混沌社の活動がありました。片山北海を中心として、詩を作って楽しんでいただけですが、この時点ではまだ竹山と春水の交遊は芽生えていません。竹山の弟子の中には混沌社のメンバーもいたわけですが、竹山自身は混沌社の人々と一緒に詩を作って楽しむということをしていませんで、客員クラスとして、メ

ンバーと交際するという程度だったようです。一方春水の場合は、どちらかと言えば、大阪に出て来て書の方で名がうれ、弟子をとってかせいでいるような状況でしたから、この当時二人の間に交流がなかったとしても不思議ではありません。竹山の書いたものの中にも、安芸国から弥太郎（春水のこと）という者が来たというのを聞いたけれども、神童というものは大抵二十歳を過ぎればダメになるし、これから先もつきあうことになるかどうかはわからぬから会わなかった、とあります。

それから何年か後、竹山の周囲の人々が春水のことを誉めるので春水の書いたものを読んでみると、確かに秀れている。秀れているが、それがはたして本物の才能であるかどうかはわからない。それでまだ会わないでいた。そうした時、竹山の弟子で明石藩の大阪蔵屋敷の役人である大島官兵衛（赤水）という人がいましたが、たまたまこの人の所で詩会が催された時、初めて春水と出会ったようです。その年代ははっきりとはわかりませんが、恐らく明和六・七年の頃であつたかと思われます。その時、竹山は春水のことを、この男は間違いない、十六歳年下ではあるがつきあいを始めた、と自ら書き残しております。その当時春水には森田士徳というパトロン

がいました、これは福山藩の御用達もしていたような豪商でしたが、この人の援助で安永二年江戸堀北一丁目に青山社という塾を開きます。そしてこの青山社の活動において、少壮の朱子学者として次第に名声を得、やがて竹山先生と非常に親しい交際を結ぶことになります。

この春水と竹山先生との交際の中で、後の頼山陽の『日本外史』執筆ともつながるようなことがあります。つまり、春水は青山社で塾生をとっている間、懷徳堂から水戸の『大日本史』を借りて来て筆写しているのであります。これはもともと、竹山が京都のさる大名から手に入れて、懷徳堂の塾生を挙げて筆写させたものであります。当時『大日本史』は「大名道具」と言われた程で、大名たるもの『大日本史』ぐらい持っていないければならぬとされたものでありまして、春水も頼まれて、この百巻にも余る大部な書物を懷徳堂から借り、兄弟や門弟を総動員して四回程筆写しております。その一つを津和野藩に納め、一つを自分の出身である広島藩に献上しました。これが後に、春水が広島藩儒に登用される契機となります。このことに関連して、広島藩では最初中井竹山を訪れ、新たな学問所を開くために良い先生を紹介してくれと頼んだ所、尾藤二洲が紹介されたので

すが、二洲は、友人で広島藩の出身である春水を代りに推薦したという話も伝わっております。

さて、この頃は、春水も三十を過ぎていろいろ結婚話もありましたが、ひとかどの学者として認められるまでは、あるいは郷里の竹原に帰って親に孝行を尽したいなどためらっていました。親の方では大阪で頑張れと言いますし、結局竹山先生の紹介を仰ぐこととなりました。当時大阪の儒医に篠田（飯岡）義斎という人がいました。篠田家は中井家とは永島家を介しての縁家でした。この義斎に娘が二人あり、長女のお静さん（号は梅颺）を竹山先生が春水に紹介したわけであります。当時の大阪の風習では、結婚する当人より目下の人が仲人をするのが普通であつたようですが、春水から見れば先輩でもあり学者として尊敬してもいる竹山先生が仲人になつてくれるというので、大変感激しております。こうしたことを考えてみしても、竹山先生という人は、世間の風習にあまり頓着しない人だつたようです。また、結婚の折には祝いの漢詩を竹山先生が作つて下さり、一時大阪で喧伝されたということを後に春水が書いております。一方、お静さんにしてみれば、春水はいくら学問があると言っても、安芸の田舎から出て来たどこの馬の骨

ともわからぬような人物でありますから、春水との結婚に到つたというのも、竹山先生をめぐつての結びつきであつたと言つてよいでしょう。

そして、結婚の翌年（安永九年）に山陽が生まれしました。余談ですが、春水の弟の春風は父祖の跡を継いで竹原に残り、春水は広島に出たものですから、山陽の生まれについて、竹原の人は竹原だと言いますし、広島の人には広島の生まれだと言っていますが、実は大阪の生まれなんです。現在も、山陽が生まれた江戸堀の一丁目跡地附近に、山陽が出生したという碑が一基立っています。

また、当時の詳しい縁家のつながりは調べていませんが、中井碩果の奥さんは義斎の弟の滄浪の娘でありまして、中井家ともまた深いつながりができています。つまり、中井家と頼家の間には相当な縁戚関係が認められます。当時寛政異学の禁を歓迎した朱子学派グループには、このような縁戚関係がありまして、例えばお静さん（梅颺）の妹のお直さん（梅月）は後に尾藤二洲の後添になりました。

春水は、広島の学問所が軌道に乗った天明から寛政にかけて、十二年のうち十年近く江戸詰めということになります。若殿教育で江戸に行くわけであります。その往

反の間に、必ず大阪滞在期間を設け、かつて世話になった人々や友人に挨拶して回るといふ交際を続けていますが、それ以外にも竹山先生との手紙のやり取りは実に頻繁であります。また、菅茶山とのやりとりにおきまして、春水から月に四度手紙が来ることはあっても、一度も来なかった月は四十年のつきあいの中でも無かったという程でありまして、頻繁にお互いの動静を知らせ合っていたようであります。

こうした手紙は、歴史研究の中でも翻刻するのが遅れている分野でありまして、懷徳堂資料にも残っていますし、頼の方でも出して行けば、当時の状況が手に取るようにわかるのではないかと思っております。私の友人などは、そんなことは停年後にしろと申しますが、停年後目が悪くなつて古文書を読む忍耐力が無くなつたらできないと思ひまして、少しずつでも読んでゐる次第です。いずれ大阪や広島周辺に残っているものを集大成すれば、当時の学界の状況がもっと明らかになるものと思っております。

さて最後に、頼山陽とのつながりで二・三つけ加えますと、父親の春水に、混沌社の友人で号を篠崎三島という詩人でもあり学者でもあった人がいましたが、その養

子の篠崎小竹という人が山陽と大変親しい友人でありました。また、山陽が『日本外史』や『日本政記』などを執筆することになったのは、春水が懷徳堂から『大日本史』を借りて来たことに由来すると先程申しましたが、

春水と一緒に学問をしていました、尾藤二洲・古賀精里あるいは竹山の弟履軒たちの間で、『大日本史』筆写・校正をきつかけとして、自国の歴史というものに非常に注目するようになる、例えば、詠詩の題材にまで、我國の歴史に関する事柄が取り上げられている。これなども、彼らがいかに歴史に対する正しい認識を深めていこうとしていたかの表われでありましょう。これに影響されてか、藩儒に登用されておりました春水は自分で歴史を編纂しようと思ひ立つわけですが、仕事の都合で結局断念してしまいます。ですから、山陽はこの父の志を受け継いで歴史書の編纂を志したと考えられます。山陽の史観は、ほとんど水戸の『大日本史』の史観と変わらなと言われますのも、広島藩の文庫から父である春水が献上した『大日本史』の写本を借り、身近に置いて読むことができたからでありましょう。また、山陽はしばしば三都でなければ学問はできない、名をなせないと発言しております。広島で学問をしていてもダメだと、父の

春水や菅茶山などを見て痛感したようであります。さらに、これには母親である梅颯の影響が強かったとも考えられます。この梅颯という人は、初めにも申しましたが、田沼時代の大坂の雰囲気を感じた女性でありました。結婚する時、義斎さんが春水に向かって、自分の娘には琴を習わせず、縫い物を能くするという事を自慢しておりましたが、実は煙草は吸いますし、歌を詠み学問もたしなみまして、春水も手に負えないような所があったようです。しかし春水も大阪の町人の家庭生活に慣れ親しんでおりました。こうしたことから、山陽は、この辺にふせていてはダメだ、三都に出て高名な学者と立ち打ちできるような人物にならねばならぬ、そのためには学問もするし、何か一つ後世に名を残すようなまとまった仕事もやりたいと思っていたのも、やはり大阪の影響があつてのことでしょう。

もう少し時代が下って、幕末になってから、大阪の学界の状況は変化し、より一層瀬戸内海方面の人々に大き

な影響を与えるようになりますが、それらも含めて、大阪と瀬戸内との関係をこれから考えて行こうと思っております。当時は、人間のつながりを大変大事にしておりましたから、少し思想や学派の相違がありましても、人間関係の方を重んじていた。ですから、そういう当時の人との交わりに注意しながら大阪の学問および大阪の持っていた都市の雰囲気が、私の地元でもあります広島や瀬戸内に与えた影響やつながりを研究することは、今後も行われなければならない事だと思われまします。

今日この記念すべき会にお招き頂き、また中井家のお墓にもお参りさせて頂くことができ、誠に感謝の念にたえません。最後に、まとまりのない話をお聞きいただきまして、どうもありがとうございます。

(広島大学教授)

〔この稿は昭和六十二年三月二十九日の懷徳忌における講演筆記に筆者の校閲を得たものです。〕